

重点課題	重点目標	目標達成に向けた取り組み(担当課)	評価の観点	評価	評価指標の達成度と活動計画の実施状況	総合評価	所見	次年度への課題今後の改善方針
1 生徒指導の推進	①他人を思いやる優しさや豊かな人間性の育成に努める。	①生徒との面談を実施し、生徒理解を深める。(生徒指導)	面談が生徒理解・生徒指導に有効であったとする担任が80%以上であった。面談が生徒理解・生徒指導に有効であったとする担任が70%以上であった。面談が生徒理解・生徒指導に有効であったとする担任が50%以上であった。面談が生徒理解・生徒指導に有効であったとする担任が50%未満であった。	A B C D	面談が「有効であった」と正担任が100%が回答している。	A	面接週間等が上手く活用できている。	ケース会議や情報提供などで共通理解を図り、生徒理解に努めている。
		②教育相談・特別支援教育の研修を実施する。(生徒指導)	研修が教育相談体制の充実に役立ったとする職員が80%以上であった。研修が教育相談体制の充実に役立ったとする職員が70%以上であった。研修が教育相談体制の充実に役立ったとする職員が50%以上であった。研修が教育相談体制の充実に役立ったとする職員が50%未満であった。	A B C D	「個別の教育支援計画・指導計画を作成するために」みなど高等学園巡回相談員による講義と演習を実施した。。役に立ったとする職員が100%であった。		事例から支援方法を考える演習が好評であった。	アンケート結果を参考に教職員の要望を取り入れた研修を実施する。
	②社会のルールや校則を厳守させ、規範意識の向上を図る。	①定期的に服装・頭髪検査を実施する。(生徒指導)	違反者数が0になった。全体で違反者数が10人未満になった。違反者数が前年度とほぼ同数であった。違反者数が前年度より増加した。	A B C D	アンケートにおいては、服装や頭髪など身だしなみに関わる校則が守れていると生徒91%(昨年度96.0%)・保護者の95.6%(昨年度95.6%)が回答しているが、現状を鑑みて、指導・支援を拡充していく必要性を感じる。	C	遅刻総数は減少した。生活習慣の改善がみられる。トラブルにあり要因が減少し、自らトラブルを回避していくような指導の拡充が行われていると感じている。	令和2年度の遅刻数は、昨年度より減少した。毎年10月以降急激に増加している点については改善された。多遅刻者の生活習慣の改善に向けて、多角的な指導と総合的な支援を実施していきたい。
		②毎日、通学指導(挨拶・身だしなみ・通学マナー)を行い遅刻者数の減少を目指す。(生徒指導)	遅刻者数が全校生の前年度の遅刻者数より10%以上減少した。遅刻者数が全校生の前年度の遅刻者数を下回った。遅刻者数が全校生の前年度の遅刻者数を上回った。遅刻者数が全校生の前年度の遅刻者数より10%以上増加した。	A B C D	1日における遅刻者数の割合が昨年より減少した。		新型コロナウイルス感染症の為、各委員会活動などが困難となったが、生徒間でマナーを良くしていくこととする雰囲気があり、学校自体が活気づいて生徒同士の自浄作用が発揮されている。	
		③学校の生徒指導の方針を明確に示し、教職員の共通理解を図る。(生徒指導)	教職員の指導目標に対する達成度が90%以上であった。教職員の指導目標に対する達成度が80%以上であった。教職員の指導目標に対する達成度が50%以上であった。教職員の指導目標に対する達成度が30%以上であった。	A B C D	「教職員の生徒指導の共通理解が図れた」という項目が87.1%(昨年度88.2%)であった。		難しかった。引き続き工夫しながら、通学指導、巡視などを通してさらに向上を図りたい。	
		④登校時の交通マナーの向上と、自転車マナーの順守を図る。(生徒指導)	定期的に生活委員が駐輪マナーを呼びかけ、大きく効果を上げた。定期的に生活委員が駐輪マナーを呼びかけ、効果を上げた。不定期ではあるが生活委員が駐輪マナーを呼びかけ、効果を上げた。不定期の実施となり、効果が上がらなかった。	A B C D	新型コロナウイルス感染症の為、毎月1回のマナーアップ活動が困難だった。生徒自ら駐輪マナーを大きく向上させる効果は不明である。			
		⑤教職員・PTA・生活安全委員で協力し、交通安全の啓発のための安全指導・交通マナーアップキャンペーンを行う。(生徒指導)	教職員・PTA・生活安全委員で協力し、計画通りに実施することができた。定期的に実施することができた。不定期ではあるが、実施することができた。実施することができなかった。	A B C D	新型コロナウイルス感染症の為、毎学期に1回のマナーアップ活動にPTA役員、生活委員で校門指導を実施しできなかった。			
		⑥長期休業中に校外巡視を実施する。(生徒指導)	年3回以上実施し、問題行動等未然防止に成果をあげた。年2回実施した。年1回実施した。全く実施できなかった。	A B C D	新型コロナウイルス感染症の為、計画通りに、校外巡視を実施することが難しかったが、2学期以降は、校外における生徒の実態把握に努めた。			
		⑦補導センター・警察に学期ごとに訪問し、情報交換に努める。(生徒指導)	十分意見交換ができ、生徒指導に活かすことができた。毎月訪問をし、十分な意見交換ができた。毎月訪問したが、十分な意見交換ができなかった。毎月訪問できなかった。	A B C D	新型コロナウイルス感染症の為、毎月1回の割合で警察等の関係機関に訪問できなかった。情報を電話連絡で共有に心がけた。			
	③生徒理解を深め、個に応じた生徒指導に努める。	①問題行動等を起こした生徒や、好きな学校生活のできていない生徒の保護者に対する面談を実施する。(生徒指導)	保護者と共通理解を図り、生徒に対する支援に成果を上げた。保護者との共通理解は図れたが、生徒に対する支援の成果は不十分であった。保護者との共通理解は図れたが、生徒に対する支援の成果を上げられなかった。保護者との共通理解を図ることができなかった。	A B C D	問題行動を起こした生徒に対し、保護者や関係機関と連携して対応できた。	A	家庭連絡・訪問をまめに行うなどし、生徒の実態を把握している。	日頃の生活習慣の乱れや生徒の顔つきの変化がトラブルにつながる傾向があり、小さな変化にも気づけるように教員間でさらに情報を共有できるような体制を構築していかなければいけない。
		②いじめ防止等のためにアンケートを実施する。(生徒指導)	年2回以上実施し、いじめ等を未然防止に成果をあげた。年2回実施した。年1回実施した。全く実施できなかった。	A B C D	毎学期に1回実施し、生徒の実態を把握し、トラブルにつながるような事案を未然に防げるように努めている。			

重点課題	重点目標	目標達成に向けた取り組み (担当課)	評価の観点	評価	評価指標の達成度と活動計画 の実施状況	総合 評価	所見	次年度への課題 今後の改善方策
2 環境教育・安全教育の推進	①生命を尊重し、心身の健康と環境問題への意識の高揚をはかり、自他の安全を守る能力を育成する。	①心肺蘇生・AED訓練を実施し、応急手当の知識や技術の習得を図る。 (保健環境)	心肺蘇生・AED訓練に参加し、知識と技術を習得することができた教職員が80%以上であった。 心肺蘇生・AED訓練に参加し、知識と技術を習得することができた教職員が70%以上であった。 心肺蘇生・AED訓練に参加し、知識と技術を習得することができた教職員が50%以上であった。 心肺蘇生・AED訓練に参加し、知識と技術を習得することができた教職員が50%未満であった。	Ⓐ B C D	新型コロナウイルス感染拡大防止のため実技はできなかったが、「習得できた」が92%であり、達成できたとする。	B	新型コロナウイルス感染拡大防止のため、心肺蘇生・AED訓練や定期健康診断が計画通りに実施できなかったが、学校医や研修会の講師と相談し、予防策をとりながら実施し最善を尽くすことができた。	心肺蘇生・AED訓練は、定期的・継続的に実施することが大切なので、次年度も引き続き継続していく。 定期健康診断の受診率を100%にするためには保護者や部活動の顧問の協力が欠かせない。定期的な声かけをし、家庭の事情でどうしても受診できない場合は次年度に必ず受診するよう指導を続けていく。 AEDの設置場所および使用方法について、年次が上がっていることに認知度が上がっている。保健だよりやポスター、保健の授業などで啓発活動を続けていく。
		②健康について関心を持たせ、疾病異常の早期発見のため、健康診断の受診や事後措置の徹底を図る。 (保健環境)	健康診断受診率が100%であった。 健康診断受診率が95%以上であった。 健康診断受診率が90%以上であった。 健康診断受診率が90%未満であった。	Ⓐ B C D	内科・心電図の欠席者は養護教諭が引率して受診させているため、100%受診できている。しかし歯科・眼科・耳鼻科の欠席者は保護者へ依頼しているので全員受診が難しい。			
		③生活習慣に関する調査を実施し、活用する。 (保健環境)	調査結果が生徒理解・生徒指導に役立ったとする担当が80%以上であった。 調査結果が生徒理解・生徒指導に役立ったとする担当が70%以上であった。 調査結果が生徒理解・生徒指導に役立ったとする担当が50%以上であった。 調査結果が生徒理解・生徒指導に役立ったとする担当が50%未満であった。	Ⓐ B C D	「有効であった」が100%であり、達成できたとする。			
		④保健だよりやホームルームでの啓発等あらゆる機会を捉えてAEDの設置場所について周知を図る。 (保健環境)	AEDの設置場所・使用方法を知っている生徒が80%以上であった。 AEDの設置場所・使用方法を知っている生徒が70%以上であった。 AEDの設置場所・使用方法を知っている生徒が50%以上であった。 AEDの設置場所・使用方法を知っている生徒が50%未満であった。	Ⓐ B C D	AED講習会が開催できず、設置場所を知っているのは70%、使用方法を知っているのは67%と昨年度より認知度が下がった。			
	②校内美化に努め、情操豊かな学校環境づくりに努める。	①毎日の清掃や大掃除を積極的に行わせ、学習環境を自ら整えさせる。 (保健環境)	意欲的に清掃に取り組んだ生徒が80%以上であった。 意欲的に清掃に取り組んだ生徒が70%以上であった。 意欲的に清掃に取り組んだ生徒が60%以上であった。 意欲的に清掃に取り組んだ生徒が60%未満であった。	Ⓐ B C D	多くの生徒が、清掃に対して意欲的に取り組んでいる。校内の美化に努め、学習環境の整備に対して高い意識を持っている。	B	学習環境の整備に関しては、多くの生徒が取り組む姿勢を持っている。日々の清掃やゴミの分別などに意欲的に取り組み、環境作りに取り組んでいる。	環境整美委員による清掃チェックを定期的に行い、清掃に対する意識付けを行う必要がある。ゴミに分別やポイ捨ての防止については掲示物等を用いて取り組まなければならない。生徒への指導をこまめに行うことが学習環境作りにつながると考える。
		②ホームルームにおいてゴミの分別(新学校版環境ISO)に対する意識の高揚を図る。 (保健環境)	ゴミの分別ができている生徒が90%以上であった。 ゴミの分別ができている生徒が80%以上であった。 ゴミの分別ができている生徒が70%以上であった。 ゴミの分別ができている生徒が70%未満であった。	Ⓐ B C D	多くの生徒がゴミの分別に対して、高い意識を持っている。分別に対する知識だけでなく、分別に取り組む意識も持っている。			
		③ゴミ処理の意識の高揚を図る。 (保健環境)	校内でゴミのポイ捨てが無く、ゴミ箱に捨てられ、余計なゴミの持込も無い。 校内でゴミのポイ捨てが少なく、ゴミ箱に捨てられ、余計なゴミの持込も少ない。 校内でゴミのポイ捨てがあり、余計なゴミの持込もやや多い。 校内でゴミのポイ捨てが多く、余計なゴミの持込も多い。	Ⓐ B C D	校内には多少のゴミは【見受けられるが、ポイ捨ては少なく、ゴミ箱をきちんと活用されている。また、余計なゴミは非常に少ない。			
	③防災・減災教育を推進し、地域防災の即戦力および将来の担い手を育成する。	①防災訓練を実施し、防災拠点としての役割を正しく認識している。 (保健環境)	全教職員の80%以上が防災体制が確立していると感じている。 全教職員の70%以上が防災体制が確立していると感じている。 全教職員の60%以上が防災体制が確立していると感じている。 防災体制が確立していると感じている教職員が60%未満であった。	Ⓐ B C D	本校は、南海トラフ地震や津波の影響を受ける可能性があるため、教職員の多くが防災に対して高い意識を持っている。	A	教職員、生徒とも防災時の本校の役割や状況を認識している。	地域の防災拠点としての役割を教職員へ周知し、有事の際には適切な対応ができるようにしておかなければならない。生徒への災害時の指導をより一層徹底しなければならない。
		②防災教育や防災計画を通して、防災準備(避難グッズや経路の確認)率を高める。 (保健環境)	防災準備が整った生徒が80%以上であった。 防災準備が整った生徒が70%以上であった。 防災準備が整った生徒が60%以上であった。 防災準備が整った生徒が60%未満であった。	Ⓐ B C D	生徒は、本校の環境を理解しており、防災に対して高い意識を持っている。避難訓練でも意欲的に取り組んでいる。			

重点課題	重点目標	目標達成に向けた取り組み(担当課)	評価の観点	評価	評価指標の達成度と活動計画の実施状況	総合評価	所見	次年度への課題今後の改善方策
3 特別活動の推進	①ホームルーム活動・生徒会活動や学校行事を活性化させ、自主性や実践的な態度を育成する。	①生徒会を中心としたあいさつ運動や清掃奉仕活動等が毎月計画的に企画・運営され、多くの生徒が活動に参加するように支援する。(特別活動)	生徒会や専門委員会が中心となり企画運営ができ、毎月実施した。生徒会や専門委員会の一部の生徒で実施した。実施はしたが、不定期であった。実施しなかった。	A B C D	あいさつ運動においては計画に沿って毎月実施し、生徒会が積極的に運営することができた。	A	あいさつの励行や清掃奉仕活動などでは部活動の生徒が積極的に取り組んでいた。また競技力、実績共に向上した部が多く、学校の活性化に繋がった。学校行事においては、81.3%の生徒が「楽しく参加できた」または「達成感が得られた」と感じており、更に生徒が意欲的に活動できる環境を整えたい。	各専門委員会の活動の活性化を図るため、役員を選定方法などを見直す必要がある。
		②生徒会を中心とした生徒主体の球技大会・学校祭が企画・運営されるように支援する。(特別活動)	生徒会が中心となり、自発的に企画運営でき、各行事が円滑に行われた。生徒会が中心となり、各行事を実施できた。生徒会が中心となり企画したがあまり協力を得られず運営が円滑ではなかった。生徒会や専門委員会が機能しなかった。	A B C D	学校行事の一部に関しては生徒会が自発的に企画を提案し、運営する場面も見受けられた。計画・運営においては教員始動ではあるが、生徒会が中心となって実施した。			
		③学校行事において、個人の個性が活かせ、積極的にできるように支援する。(特別活動)	一人一人の個性が十分に発揮された。一人一人の個性がおおむね発揮された。一部の生徒のみの活動であった。生徒の個性が発揮されず、活気が感じられなかった。	A B C D	クラスや各種委員会での役割を分担したり、文化的・体育的な活動の場を増やすことで、生徒一人一人の個性が発揮されていた。			
		④専門委員会活動の活性化を図るため、各専門委員会の役割を明確にし責任を果たせるように支援する。(特別活動)	70%以上の生徒が役割を自覚し、その責任を果たせた。60%以上の生徒が役割を自覚し、その責任はおおむね果たせた。役割は自覚していたが、あまりその責任を果たすことができなかった。役割の自覚が十分でなく、その責任を果たせなかった。	A B C D	役割を自覚し、その責任をおおむね果たせた生徒が87.6%であった。昨年より19.67%増加した。			
	②部活動を推進し、スポーツ活動において質の高い専門教育を行い、競技力の向上を図るとともに、スポーツ振興に寄与する人材を育成する。	①部活動の意義について理解し、計画的に実施し生徒の自主的・自発的活動を支援する。(特別活動)	部活動の年間計画に沿って活動ができ、その目標を達成することができた。年間計画に沿った活動がほぼできたが、目標の達成には及ばなかった。年間計画通りの活動があまりできず、目標の見直しの必要性を感じた。年間計画に沿った活動ができず、各部の方針や目標を達成することができなかった。	A B C D	53.8%以上の部活動が年間計画に沿って活動ができ、その目標を達成することができたと答えている。(生徒指数61.0%)	A	部活動の登録者数は8割を超えるが、活動をしていない生徒も多く、登録方法や意欲の低い生徒の指導について検討していきたい。	
		②部活動を推進するため、関係機関との連携や、指導方法について工夫し、専門性を高め競技力の向上を図る。(特別活動)	昨年度実績より競技力が向上した。昨年度実績とほぼ同等の競技力であった。昨年度実績よりやや競技力が低下した。昨年度実績より大幅に競技力が低下した。	A B C D	「昨年度よりも競技力が向上した」、あるいは「昨年度と同等の競技力であった」と体育部顧問93.5%の指導者が答えている。全体では74.3%であった。			
	③ボランティア活動を積極的に行い、豊かな人間性を育てる。	①自分自身の生活する学校や地域社会において起こる課題の解決に対して、自分自身が自発的・主体的にその問題を解決していこうとする。(特別活動)	ボランティア活動の意義を理解し、主体的・積極的に参加し、継続できた。ボランティア活動の意義を理解し、主体的・積極的に参加した。積極的ではなかったが、周りがやっていたので活動には参加した。ボランティア活動は何もしなかった。	A B C D	学校の内外でのボランティア活動について広報するとともに、生徒の活動を盛り上げた。ボランティア活動の意義を理解し、主体的・積極的に参加した生徒が58.8%であった。授業では講演会を通して地域社会への親しみや世界の文化の理解を進めた。また、インターアクト部は校内草抜き、学校周辺～撫養駅まで清掃活動、日赤令和2年7月豪雨災害義援金、赤い羽根共同募金活動等積極的に行うことができた。	A	積極的に地域に対し、ボランティアをしようとする生徒がいると同時に生徒に対するアンケートでは「あまり興味がなく参加しなかった」という関心のない生徒が35.7%と多かった。	自分自身の所属する学校や地域社会に対して愛着を持ち、問題解決をしていこうという態度を生徒に持たせるために、学校行事、生徒総会、清掃活動などを充実させていく。

重点課題	重点目標	目標達成に向けた取り組み(担当課)	評価の観点	評価	評価指標の達成度と活動計画の実施状況	総合評価	所見	次年度への課題 今後の改善方策
4 学習指導の充実	①基礎的・基本的な事項の指導を徹底し、基礎学力の向上定着を図る。	①生徒が理解しやすいように配慮した授業をする。(教務)	生徒の85%以上が授業が分かると感じている。 生徒の75%以上が授業が分かると感じている。 生徒の65%以上が授業が分かると感じている。 生徒の65%未満が授業が分かると感じている。	A B C D	ほとんど理解できているが28.2%、半分ぐらいは理解できている58.2%で86.4%の生徒は理解できている。	B	教材・教具の工夫や今後ICTの活用についての研修も必要である。	○教室のインベーション事業が実施される前に、ICTの利活用方法について研修を行う。(授業理解)
		②定期考査に向けて学習計画を立てて考査に臨ませる。(進路指導)	学習計画を立てて、考査の勉強も十分できた生徒の割合が50%以上であった。 学習計画を立てなかったが、考査の勉強は十分できた生徒の割合が50%以上であった。 学習計画を立てて、考査の勉強も十分できた生徒の割合が50%未満であった。 学習計画を立てなかったが、考査の勉強は十分できた生徒の割合が50%未満であった。	A B C D	計画の有無にかかわらず、考査の勉強が十分できた生徒は54.8%であったが、計画を立てて勉強も十分できた生徒の割合は21.6%にとどまった。		計画を立てた生徒は6割近くいるので、実行できるように促す必要がある。	
		③始業チャイムを生徒とともに聞く。(教務)	毎授業チャイムを教室で聞いた教員が80%以上であった。 毎授業チャイムを教室で聞いた教員が70%以上であった。 毎授業チャイムを教室で聞いた教員が60%以上であった。 毎授業チャイムを教室で聞いた教員が60%未満であった。	A B C D	92.3%の教員がほぼ毎授業チャイムで授業が開始できている。		時間割や教室割りについて再度工夫する必要がある。	
		④各教科において、資格や検定受検を積極的に薦め、指導・支援する。(進路指導)	検定の基本級合格率が55%以上であった。 検定の基本級合格率が50%以上であった。 検定の基本級合格率が50%未満であったが、受験者数が増加した。 検定の基本級合格率が50%未満で、受験者数も減少した。	A B C D	基本級の合格率は69.9%であった。		実施できる検定が減少し、厳しい状況の中、精一杯の取り組みをした結果だと思われる。	
	②幅広い選択科目を設定し、生徒一人ひとりの興味・関心・進路に応じた履修指導を推進する。	①個別の相談体制を充実させ、個々の生徒に応じた時間割の作成に努める。(教務)	生徒の90%以上が十分な相談体制のもと時間割を作成できたと感じている。 生徒の80%以上が十分な相談体制のもと時間割を作成できたと感じている。 生徒の70%以上が十分な相談体制のもと時間割を作成できたと感じている。 生徒の70%未満が十分な相談体制のもと時間割を作成できたと感じている。	A B C D	89.2%の生徒が十分な相談体制で時間割を作成できたと感じている。	B	年次会などで履修についての共通認識や生徒に対する指導・相談についての協体制を再度検討する必要がある。進路指導課とも協力し、進路希望と履修についてのリンクを強化する必要がある。	○生徒への説明資料の充実や相談体制の構築を図る。
		②生徒の個性・進路に合った科目選択をさせる。(教務)	生徒の時間割満足度が90%以上であった。 生徒の時間割満足度が80%以上であった。 生徒の時間割満足度が70%以上であった。 生徒の時間割満足度が70%未満であった。	A B C D	83.2%の生徒が科目選択に満足している。			
	③生徒の学習意欲を引き出す指導体制・指導方法の工夫改善を図る。	①学習週間・面接週間を設け、学習の習慣化を図り、面接を効果的に利用する。(教務)	生徒の90%以上が学習週間・面接週間の取組が良かったと感じている。 生徒の80%以上が学習週間・面接週間の取組が良かったと感じている。 生徒の70%以上が学習週間・面接週間の取組が良かったと感じている。 生徒の70%未満が学習週間・面接週間の取組が良かったと感じている。	A B C D	72.6%の生徒が面接週間の取組が良かったと感じている。	B	面接週間でのねらいなど、進路指導課や生徒指導課と協調していく必要がある。具体的なテーマの設	それぞれの面接週間におけるメインテーマを各課と協力して設定する。「わかる授業」の実践に向け、基礎・基本の定着を重視した目標設定を行い、成果を上げた。今後、生徒の自主性・創造性を高め、基礎・基本を発展させる指導が必要である。また教員間同士の授業参観が定着し、授業スキルの向上につながっており、さらに高めていく。
		②全員が学力向上に向けて個人目標を設定し、取り組みを推進する。(教頭)	育成評価システムにおける学習指導の評価B以上が全教員の90%以上であった。 育成評価システムにおける学習指導の評価B以上が全教員の80%以上であった。 育成評価システムにおける学習指導の評価B以上が全教員の70%以上であった。 育成評価システムにおける学習指導の評価B以上が全教員の70%以上であった。	A B C D	各自で学習指導目標を立て、指導方法を工夫し学習計画を立てるなどし、95%の教員が評価B以上であった。		基礎・基本の定着を重視した目標設定を行い、「わかる授業」の実践に取り組んだ。また教員間同士の授業参観が定着し、授業スキルの向上につ	
		③教員相互間の授業見学および研究授業を実施し、指導方法向上を目指す。(学力向上)	教員の全員が指導方法向上に向けた取り組みを行った。 教員の90%以上が指導方法向上に向けた取り組みを行った。 教員の80%以上が指導方法向上に向けた取り組みを行った。 教員の80%未満しか指導方法向上に向けた取り組みを行えなかった。	A B C D	93%の教員が相互授業参観、または研究授業に参加し指導の向上に努めた。			

重点課題	重点目標	目標達成に向けた取り組み(担当課)	評価の観点	評価	評価指標の達成度と活動計画の実施状況	総合評価	所見	次年度への課題 今後の改善方策
5 進路指導の徹底	①生徒一人ひとりの学力や適性などを的確に把握し、個に応じたきめ細やかな指導を徹底する。	①面談を通じて生徒の学力・適性・個性を把握する。 (進路指導)	面談を活用し、十分な生徒理解と、進路に対するアドバイスができた。 面談を活用し、おおむね生徒理解ができた。 面談を実施したが、満足いく生徒理解ができなかった。 面談を実施できなかった。	A B C D	「役立った」が46.7%、「少し役立った」が38.5%、との回答であった。 (合計85.2%)	B	生徒理解のためには個別面談は不可欠なものである。今年度は年度当初の面談が6月となったが、きめ細かな面談を行い、生徒理解に努めた。3年次においては、試験日程の変更等、これまでとは違う対応が必要であった。	進路に関する情報の共有と活用については、より迅速にできるよう、担任との連携を密にする必要がある。面談等がスムーズに行えるよう、資料等の充実を図りたい。
		②進路対策会議を実施する。 (進路指導)	必要な情報を共有し、進路指導に十分活用することができた。 必要な情報を共有することはできたが、十分活用することができなかった。 必要と感じる情報を共有することができなかった。 進路対策会議を実施しなかった。	A B C D	「大変役立った」が28.2%、「役立った」が51.3%、との回答であった。 (合計79.5%)			
		③生徒一人一人の進路実現に向けての支援体制を拡充する。 (進路指導)	支援体制について生徒の80%以上が満足した。 支援体制について生徒の70%以上が満足した。 支援体制について生徒の50%以上が満足した。 支援体制について生徒の50%未満しか満足しなかった。	A B C D	「そう思う」が57.9%、「少しはそう思う」が30.0%、との回答であった。 (合計87.9%)			
	②スポーツ科学科・総合学科の特性を考慮したキャリア教育を推進する。	①インターンシップ、大学・専門学校訪問を行い、事前事後の指導を充実させる。 (企画)	参加生徒の80%以上が満足した。 参加生徒の70%以上が満足した。 参加生徒の50%以上が満足した。 参加生徒の50%未満しか満足しなかった。	A B C D	インターンシップを実施できなかったが、それに替えて進路別学習や面接指導を実施した。「次年度に大変活かせる」38.0%、「少し活かせる」44.5%であった。(合計82.5%)	A	今年度はインターンシップ、大学・専門学校訪問が実施できなかったが、その分進路別学習や面接指導、講演・出前講座等を充実させるよう工夫した。また、産社・総探・総学の内容及び課題研究発表会には多くの生徒が満足しており成果が現れた。	次年度は方法を工夫して実施できるよう検討したい。  今年度は新型コロナウイルスの影響で多くの変更があったが、反省を次年度に活かし内容を再検討したい。  年次団、企画課で協力し、発表内容や発表方法のさらなる工夫・改善をしたいいきたい。
		②1年次総合学科における「産社」、2年次・3年次の「総探」「総学」の内容を充実させる。 (企画)	生徒の80%以上が「産社」・「総探」・「総学」の授業に満足した。 生徒の70%以上が「産社」・「総探」・「総学」の授業に満足した。 生徒の50%以上が「産社」・「総探」・「総学」の授業に満足した。 生徒の50%未満しか「産社」・「総探」・「総学」の授業に満足しなかった。	A B C D	23.8%が「授業内容が大変よかった」、36.1%が「良かった」、28.5%が「普通」と回答した。(合計88.4%)			
		③総学の「課題研究発表会」を充実させる。 (企画)	生徒の80%以上が発表会に満足した。 生徒の70%以上が発表会に満足した。 生徒の50%以上が発表会に満足した。 生徒の50%未満しか発表会に満足しなかった。	A B C D	40.2%が「大変満足した」、54.5%が「満足した」と回答した。(合計94.7%)			
		④スポーツ科学科の進路に対して大学等を含め情報提供に努める。 (進路指導)	進路情報の提供について、スポーツ科学科生徒の80%以上が満足した。 進路情報の提供について、スポーツ科学科生徒の70%以上が満足した。 進路情報の提供について、スポーツ科学科生徒の50%以上が満足した。 進路情報の提供について、スポーツ科学科生徒の50%未満しか満足しなかった。	A B C D	25.8%が「大変満足した」、55.1%が「満足した」と回答した。(合計80.9%)			
	③進路設計や進路選択に必要な情報提供を組織的・計画的に行い、生徒一人ひとりの勤労観・職業観の育成を図る。	①進路講演会・講話・ホームルーム活動を通じて生徒の職業観・勤労観に努める。 (進路指導)	進路情報の提供について、生徒の80%以上が満足した。 進路情報の提供について、生徒の70%以上が満足した。 進路情報の提供について、生徒の50%以上が満足した。 進路情報の提供について、生徒の50%未満しか満足しなかった。	A B C D	「役立った」が37.0%、「少し役立った」が43.1%、との回答であった。 (合計80.1%)	A	8割の生徒が満足しているようなので、この取り組みは適切であったと思われる。	「進路のしおり」については制度等の変更に対して柔軟に対応し、使いやすいものに改訂を行いたい。
		②ホームルーム活動を含め、進路のしおりを活用する。 (進路指導)	進路のしおりを利用した生徒が80%以上であった。 進路のしおりを利用した生徒が70%以上であった。 進路のしおりを利用した生徒が50%以上であった。 進路のしおりを利用した生徒が50%未満であった。	A B C D	3年次で「よく活用した」が40.5%、「少し活用した」が39.5%、との回答であった。(合計80.0%)			

重点課題	重点目標	目標達成に向けた取り組み(担当課)	評価の観点	評価	評価指標の達成度と活動計画の実施状況	総合評価	所見	次年度への課題 今後の改善方策
6 人権教育推進	①各教科・科目・ホームルーム活動・「産業社会と人間」「総合的な学習の時間」等全ての教育活動に人権尊重の理念を定着させる。(人権教育)	①各教科・科目・ホームルーム活動・「産業社会と人間」「総合的な学習の時間」等全ての教育活動に人権尊重の理念を定着させる。(人権教育)	各教科の人権教育の学習評価で、「大変満足した」「満足している」の合計が80%以上であった。各教科の人権教育の学習評価で、「大変満足した」「満足している」の合計が70%以上であった。各教科の人権教育の学習評価で、「大変満足した」「満足している」の合計が50%以上であった。各教科の人権教育の学習評価で、「大変満足した」「満足している」の合計が40%以上であった。	A B C D	コロナ禍のため「産業社会と人間」の講座は、9月からの実施となった。外部講師を招いての人権学習の視点を取り入れた授業展開を実施し、生徒の取り組みはほぼ良好であった。人権教育の満足度79.5%。	A	各教科における学習や「産業社会と人間」「総合的な学習の時間」において、本校の特色(スポーツ科学科と総合学科や防災拠点校など)を生かした人権教育のあり方を考える必要があると思われる。生徒が自らの課題として人権問題をとらえ、主体的に取り組もうとする指導計画の充実をめざす。夏期休業中の課題にしている人権意見作文はほとんどの生徒が提出できた。そして、それを校内人権意見発表会につなげているが、発表者の人権問題に対する真摯な気持ちが聴取者に伝わり、人権意識の向上につなげることができた。ただ、3年次は3密を避けるため不参加だったので内容を共有できなかったことは残念だった。教職員研修会等の人権に関する講演会等は、実施出来なかったが、人権HR研究授業や総合的な探求の時間などで生徒とともに学ぶことが出来た。事後の教職員アンケートで、人権教育の推進に「大変役立った」が、30.8%、「役に立った」が66.7%を占めた。人権問題解消に向けた前向きな記述が多数あり、その成果がうかがわれた。	新型コロナウイルス感染症防止対策を踏まえた中で、本校の特色(スポーツ科学科と総合学科や防災拠点校など)を生かした人権教育のあり方を考える必要があると思われる。生徒が自らの課題として人権問題をとらえ、主体的に取り組もうとする指導計画の充実をめざす。いじめなどの身近な差別事象に対して、対応できる態度を育てる。
		②人権学習ホームルーム活動を柱として、人権や命の大切さを根底に捉えた人権教育や道徳教育を推進する。(人権教育)	人権学習ホームルーム活動に「大変満足した」「満足している」生徒が70%以上であった。人権学習ホームルーム活動に「大変満足した」「満足している」生徒が60%以上であった。人権学習ホームルーム活動に「大変満足した」「満足している」生徒が50%以上であった。人権学習ホームルーム活動に「大変満足した」「満足している」生徒が40%以上であった。	A B C D	生徒の主体性を重視した人権ホームルーム活動を目指し、各担当が指導計画の工夫に努めたことにより、生徒の評価は良好な結果が得られた。			
		③人権意見作文や研修・講演会等の感想を書くことで、人権意識の向上を目指す。(人権教育)	全校生徒の90%以上が感想文を提出した。全校生徒の80%以上が感想文を提出した。全校生徒の70%以上が感想文を提出した。全校生徒の60%以上が感想文を提出した。	A B C D	人権意見作文は殆どの生徒からの提出が得られた。しかし、新型コロナ対策のため人権に関する映画会・講演会は中止や延期をした。			
	②地域や家庭と連携した人権教育を推進する。	①教職員間の人権意識向上を目指した研修会を実施する。(人権教育)	研修後、今後の人権教育の向上に役立つと感じた教職員が80%以上であった。研修後、今後の人権教育の向上に役立つと感じた教職員が70%以上であった。研修後、今後の人権教育の向上に役立つと感じた教職員が60%以上であった。研修後、今後の人権教育の向上に役立つと感じた教職員が50%以上であった。	A B C D	「研修会が人権教育の向上に役立つ」が97.5%だった。コロナ禍のため講師を招いての講演会等は実施できなかったが、感染対策をした職員研修や学校行事等で有意義な活動はできた。	B	研修会や講演会が中止になる中で、出来ること(人権HR、校内意見発表会、人権を考える日など)を実施してきた。今後も継続する中で、次年度はLGBT(セクシャルマイノリティ)や北朝鮮拉致問題について学ぶことにより、人権意識の向上につなげたい。	
		②鳴門市人権文化祭や県内各種人権問題の大会や研修会に積極的に参加する。(人権教育)	鳴人祭、各種人権大会等に参加した教職員が全体の60%以上であった。鳴人祭、各種人権大会等に参加した教職員が全体の50%以上であった。鳴人祭、各種人権大会等に参加した教職員が全体の40%以上であった。鳴人祭、各種人権大会等に参加した教職員が全体の40%未満であった。	A B C D	コロナ禍のため各種の人権大会や行事にできる限り多数の教職員が参加できることをめざし、年度当初に参加計画を立てたが、リモート開催や文書開催に変わり、例年とは違った形で研修を積んだ。			
	③自主活動の活性化に努める。	①人権委員会、人権意見発表会、校内自主活動、「中・高生による人権交流集会」等への生徒の積極的参加を促す。(人権教育)	校内外の各種人権関係行事の生徒の参加数は、60名以上であった。校内外の各種人権関係行事の生徒の参加数は、50名以上であった。校内外の各種人権関係行事の生徒の参加数は、40名以上であった。校内外の各種人権関係行事の生徒の参加数は、40名未満であった。	A B C D	校内人権問題意見発表会は、1・2年次で、会場を分けて年次ごとに実施した。すべてのクラスから発表者を得ることができ、生徒の参加状況は良好であった。3年次の参加は見送った。「中高生による人権集会」への参加は文書開催だったが、社会問題研究部が事前研修等に参加し、活発な活動があった。	A	人権委員会および社会問題研究部の活動の活性化に向けて、具体的な方策を明らかにする。	

重点課題	重点目標	目標達成に向けた取り組み(担当課)	評価の観点	評価	評価指標の達成度と活動計画の実施状況	総合評価	所見	次年度への課題 今後の改善方策
7 読書活動の推進	①生徒の自主的な読書活動を推進する。	学級文庫の利用を促進する。(図書情報)	学級文庫を利用した生徒が50%以上であった。 学級文庫を利用した生徒が30%以上であった。 学級文庫を利用した生徒が20%以上であった。 学級文庫を利用した生徒が20%未満であった。	A B C D	46.5%の生徒が利用した。	B	オンライン授業や電子教科書など、デジタル化が進んでいる時代としては、本の利用や新聞の活用度は、必ずしも低いものではないと思われる。図書館を利用したという生徒は78.8%で、図書館業務の工夫次第で活字に触れる機会は増えるものと思われる。	朝の読書週間の影響は大きいため、継続して発展させたい。
		読書感想文(夏休み課題)の提出を促す。(図書情報)	読書感想文の提出が80%以上であった。 読書感想文の提出が70%以上であった。 読書感想文の提出が60%以上であった。 読書感想文の提出が60%未満であった。	A B C D	ほぼ全員の生徒が提出した。			
	②新聞を活用した学習活動を推進する。	ホームルーム活動等で、新聞を活用する。(図書情報)	新聞を活用したホームルームが50%以上であった。 新聞を活用したホームルームが30%以上であった。 新聞を活用したホームルームが20%以上であった。 新聞を活用したホームルームが20%未満であった。	A B C D	68.8%の担任が活用した。	B	今後デジタル化されていく背景で、学級文庫や図書館蔵書の存在意義をどのように維持するか考えなければならない。	図書委員による新聞記事の切り抜き掲示は、機会を増やして、新聞をもう少し身近なものとなるようにする。
		授業で新聞を活用する。(図書情報)	新聞を活用した授業者が50%以上であった。 新聞を活用した授業者が30%以上であった。 新聞を活用した授業者が20%以上であった。 新聞を活用した授業者が20%未満であった。	A B C D	41%の教科担任が活用した。			
	③学校図書館の活用を促進する。	図書館の入館者の数を増やす。(図書情報)	入館者数が5%以上増えた。 入館者数が増えた。 入館者数が増えなかった。 入館者数が5%以上減った。	A B C D	入館者数は、前年から-2.9%であった。(臨時休校期間を除く)	C	生徒の活動場所の一つとして図書館が利用し易い環境と催し行事を設定する。	

重点課題	重点目標	目標達成に向けた取り組み(担当課)	評価の観点	評価	評価指標の達成度と活動計画の実施状況	総合評価	所見	次年度への課題今後の改善方策
8 開かれた学校づくりの推進	①公開授業,中学生体験入学などの教育活動の公開を推進する。	①公開授業を年間2回以上実施する。(企画)	年間2回以上実施し,前年度に比べて参加者の割合が100%以上であった。年間2回以上実施し,前年度に比べて参加者の割合が100%未満であった。年間2回以上実施し,前年度に比べて参加者の割合が80%未満であった。年間2回以上実施し,前年度に比べて参加者の割合が70%未満であった。	Ⓐ B C D	PTA総会が実施されなかったため,公開授業は秋の1回のみとなった。参加者は昨年度と比べて123%であった。	A	公開授業は1回のみとなったが,普段の授業の様子を見たいという保護者の方が参加して下さった。また中学生体験入学は,授業および部活動見学のオープンスクールという形での実施となったが,多くの参加があった。	公開授業が木・金曜日実施であったため,スポーツ科学科の普段の授業を参観できるように～水曜日の実施を次年度検討したい。
		②中学生体験入学での授業内容を充実させる。(企画)	体験授業の内容を「よい」と評価した生徒が90%以上であった。体験授業の内容を「よい」と評価した生徒が80%以上であった。体験授業の内容を「よい」と評価した生徒が70%以上であった。体験授業の内容を「よい」と評価した生徒が70%未満であった。	A B C D	今年度は,新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から,日程等大幅に短縮・変更し,体験授業を実施することができなかった。		次年度は実施方法を工夫して体験が実施できるように検討したい。	
		③学校祭を保護者や中高生・地域の方に開放する。(特別活動)	今年度訪問者数が300人以上であった。今年度訪問者数が200人以上であった。今年度訪問者数が150人以上であった。今年度訪問者数が150人未満であった。	A B C D	渦高祭においては今年度,新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から非公開としたため,中高生・地域の方に開放することができなかった。		渦高祭は非公開としたため,訪問者数を数えることができなかった。(特別活動課)	次年度は中高生・地域,保護者等への周知を工夫し300人以上の訪問者数を維持できるようにしたい。
	②ホームページ等を利用して迅速な情報発信をする。	メール配信システムの登録を推進する。(図書情報)	登録数が80%以上であった。登録数が60%以上であった。登録数が50%以上であった。登録数が50%未満であった。	Ⓐ B C D	電子メールを利用できない状況以外では,100%である。	A	年度当初に臨時休校があったため,学校からの教科指導や従来の連絡にメールやホームページが必要不可欠となり,登録数もアクセス数も高くなったと考えられる。	ハンコレス時代が間近になっており,学校から家庭への連絡のみならず,家庭から学校への連絡にもインターネットの利用が高くなると予想される。よりリアルタイムな対応ができる状態を常に維持できるよう体勢を整えたいと考えている。
		ホームページの内容を適宜更新し,充実を図る。(図書情報)	ホームページアクセス数が月平均1000件以上であった。ホームページアクセス数が月平均500件以上であった。ホームページアクセス数が月平均300件以上であった。ホームページアクセス数が月平均300件未満であった。	Ⓐ B C D	4月から12月の間での,月平均は1000件以上であった。			
	③地域・PTA・同窓会等との情報の共有や連携を円滑にするシステムを構築するとともに,地域の人材の活用を推進する。	①PTA総会の参加者を増加させる。(総務)	参加者が150名以上であった。参加者が120名以上であった。参加者が100名以上であった。参加者が100名未満であった。	A B C D	中止	中止		コロナ禍でも関われる総会・研修会の在り方を構築したいと考えている。
		②PTA研修を充実させ満足度を上げる。(総務)	参加者の満足度、A・B評価が80%以上であった。参加者の満足度、A・B評価が50%以上であった。参加者の満足度、A・B評価が30%以上であった。参加者の満足度、A・B評価が30%未満であった。	A B C D	中止			



重点課題	重点目標	目標達成に向けた取り組み(担当課)	評価の観点	評価	評価指標の達成度と活動計画の実施状況	総合評価	所見	次年度への課題 今後の改善方策
9 グローバル教育	①郷土の伝統・文化について理解を深める教育を推進する。	①「産業社会と人間」を通して徳島県や鳴門市の自然・歴史・文化・産業の素晴らしさを認識させる。(総合学科)	郷土の自然・歴史・文化・産業を誇りに思える生徒が70%以上であった。 郷土の自然・歴史・文化・産業を誇りに思える生徒が60%以上であった。 郷土の自然・歴史・文化・産業を誇りに思える生徒が50%以上であった。 郷土の自然・歴史・文化・産業を誇りに思える生徒が50%未満であった。	A B C D	「そう思う」と回答した生徒が27.1%、「ややそう思う」と回答した生徒が、34.3%で、合計61.4%であった。	B	講演や実地体験、調査・研究などを通じ、より深く郷土について理解することができた。	「産業社会と人間」を通じて学んだことを、実際の社会と重ね合わせて見ることで、より深い理解を追究していく。
		②インターンシップや「総学」の時間を通じ、地元へ根付き、貢献している産業・文化・歴史についての理解を深めさせる。(総合学科)	地元の産業・企業の活躍を誇りに思える生徒が70%以上であった。 地元の産業・企業の活躍を誇りに思える生徒が60%以上であった。 地元の産業・企業の活躍を誇りに思える生徒が50%以上であった。 地元の産業・企業の活躍を誇りに思える生徒が50%未満であった。	A B C D	地元の産業・企業の活躍を誇りに思い、地元企業に就職し、地元へ貢献したいというが70%以上であった。	A	地元の産業・企業の活躍を誇りに思う気持ちを高め、愛着を醸成できた。	インターンシップの実施は難しいかも知れないが、代替となるものを計画していきたい。
	②異文化理解学習を通じて共生の精神の涵養を図る。	①授業等の教育活動を通して、海外の習慣や文化に触れ、日本の文化との共通点や相違点についての理解を深めさせる。(国際交流)	世界には多様な文化があることを理解した生徒が70%以上であった。 世界には多様な文化があることを理解した生徒が60%以上であった。 世界には多様な文化があることを理解した生徒が50%以上であった。 世界には多様な文化があることを理解した生徒が50%未満であった。	A B C D	「十分理解できた」と回答した生徒が20.0%、「少し理解できた」と回答した生徒が50.2%で、合計70.2%であった。	B	各教科におけるICTを利用した授業を通じ、海外の風景や文化に触れる機会を多く持つことで理解を深めることができた。新しいALTのソナリ先生と交流を持ち、学習意欲の向上につながった。台湾交流については、姉妹校提携による2年毎の交流が行われていることを周知するために、授業やHRIにおいて事前学習を定期的	今年度はコロナウイルス感染拡大防止のため、本校生徒の台湾訪問が延期になった。交流再開時には、日本の伝統文化を伝えることをテーマに、本校生徒が台湾新竹市立成徳高級中学を訪問する予定となっている。台湾交流については、姉妹校提携による2年毎の交流が行われていることを周知するために、授業やHRIにおいて事前学習を定期的
		③ALTの先生などとの交流を通して、異文化を尊重し、自国の文化を誇りに思い、共生していく姿勢を培う。(国際交流)	異文化尊重と共生の精神について理解した生徒が70%以上であった。 異文化尊重と共生の精神について理解した生徒が60%以上であった。 異文化尊重と共生の精神について理解した生徒が50%以上であった。 異文化尊重と共生の精神について理解した生徒が50%未満であった。	A B C D	「よくできた」と回答した生徒が20.7%、「できた」と回答した生徒が48.2%で、合計68.9%だった。			
③スポーツ等を通じた国際交流を推進する。	①競技を通して海外の学生と交流する機会を設ける。(スポーツ科学科)	③次年度の台湾の学生との交流活動に向けた事前学習を行う。(国際交流)	台湾の学生との交流活動に向けた事前学習を行い、興味・関心を持った生徒が70%以上であった。 台湾の学生との交流活動に向けた事前学習を行い、興味・関心を持った生徒が60%以上であった。 台湾の学生との交流活動に向けた事前学習を行い、興味・関心を持った生徒が50%以上であった。 台湾の学生との交流活動に向けた事前学習を行い、興味・関心を持った生徒が50%未満であった。	A B C D	「よくできた」と回答した生徒が8.8%、「できた」と回答した生徒が35.6%で、合計44.4%だった。	D	国際大会、オリンピックなどの開催が延期になったが、日本に在住する外国人の交流が一部競技で行われており、積極的に交流が図られたは全体で8.8%存在する。	コロナ禍での国際交流の方策をSNS等を通じ検討していく必要がある。
		①競技を通して海外の学生と交流する機会を設ける。(スポーツ科学科)	国際大会や交流会等に参加する機会を設け、競技を通じた国際交流に積極的に取り組んだ。 国際大会や交流会等に参加する機会を設け、競技を通じた国際交流に取り組んだ。 国際大会や交流会等に参加する機会を設けたが、競技を通じた国際交流に取り組めなかった。 国際大会や交流会等に参加する機会を設けられなかった。	A B C D	コロナ禍にあって国際交流は実質的に困難であった。			

重点課題	重点目標	目標達成に向けた取り組み(担当課)	評価の観点	評価	評価指標の達成度と活動計画の実施状況	総合評価	所見	次年度への課題今後の改善方策
10 学校運営体制の充実	①教職員のコンプライアンス意識の高揚を図る。	①学校活動の様々な機会をとらえて、効果的な研修の機会を設ける。	年間を通じて8回以上研修の機会を設けた。 年間を通して6回以上研修の機会を設けた。 年間を通して5回以上研修の機会を設けた。 年間を通して研修の機会が5回未満にとどまった。	Ⓐ B C D	各学期始めと11月に全体研修会を開催するとともに、職員朝礼において時機を捉えた注意喚起を行うことができた。	A	日常的な研修・定期的な研修を実施するとともに、交通安全の全体研修を行い、交通ルールの遵守と交通事故防止の意識が高まった。	コンプライアンス意識の高まりを継続さらに高めるため、様々な視点からの研修を取り入れ、研修の質を高めていく。
		②研修の内容を精選し、受講する教職員の理解度を高める。	全教職員の90%以上が理解度が高まったと考えている。 全教職員の80%以上が理解度が高まったと考えている。 全教職員の70%以上が理解度が高まったと考えている。 理解度が高まったと考える教職員が70%未満にとどまっている。	Ⓐ B C D	研修によって、コンプライアンスに対する理解が深まったと思う職員は97.4%であった。また11月には交通安全をテーマに全体研修を実施した。			
	②危機管理態勢の徹底を図る。	①安全教育・防災教育をはじめ危機管理に関する理解を深め、危機を予測し対応できる能力と体制を整える。	全教職員の80%以上が、安全教育・防災教育の知識・技術を身につけている。 全教職員の70%以上が、安全教育・防災教育の知識・技術を身につけている。 全教職員の60%以上が、安全教育・防災教育の知識・技術を身につけている。 安全教育・防災教育の知識・技術を身につけていると考えている職員が、全体の60%未満にとどまった。	Ⓐ B C D	心肺蘇生・AED講習会に参加し、心肺蘇生・AEDの知識と技術が習得できた職員が92.3%であった。	A	職員が、めざすべき生徒像について自由にディスカッションを行う研修を行った。防災においては地域と協働した避難訓練を行うなど、より実践的な取り組みを志向している。	職員のディスカッションのテーマをひろげていくことにより、「風通しの良い職場」を推進することができる。また、防災においては、危機管理能力を高めていく必要がある。
		②教職員間の日頃のコミュニケーションを密にするとともに、「風通しの良い職場環境作り」に配慮し、創造的な意見を出しやすい環境を整える。	全教職員の85%以上が、「風通しの良い職場」であると考えている。 全教職員の75%以上が、「風通しの良い職場」であると考えている。 全教職員の65%以上が、「風通しの良い職場」であると考えている。 「風通しの良い職場」であると考えている職員が、全体の65%未満にとどまった。	Ⓐ B C D	「風通しの良い職場」だと思える職員が92.3%であった。まためざすべき生徒像の職員共通理解の研修を継続した。			
	③学校価値の創造を推進する新規事業の創出、地域の人材づくり、国際交流等、新しい企画を推進するとともに、課題解決に向けた協働体制を確立する。	①地域に貢献できる人材の育成を期待できる事業創出する。(NEXT)	地域の事業に生徒が参加協力し、全体として共に運営する機会を造った。 地域の事業に生徒が参加協力する機会を造った。 生徒に地域の事業に関する広報を行った。 地域の事業に関する協力の依頼があった。	Ⓐ B C D	新型コロナウイルスの感染状況を踏まえた地域イベント等に積極的に取り組むとともに、SDGs達成に向けて取り組むことができた。	A	新型コロナウイルス感染症の影響で地域イベント等が中止となったが、新しい生活様式を踏まえた連携等を工夫し、取り組むことができた。	新しい生活様式のもと、国際交流、地元鳴門市をはじめとした地域との協働事業を工夫しながら円滑に進めるとともに、新たな企画や連携地域・団体を検討していく。
		②各校務分掌の課長を中心に、本校の教育目標を理解し、その達成に向けた運営を行う。	課長を中心に教育目標の達成を意識した運営ができた。 教育目標を意識した運営ができていたが、一部不十分な点があった。 不十分な点もあるが、一部で教育目標を意識した運営ができていた。 教育目標の理解が不十分で達成できないケースが目立った。	Ⓐ B C D	課長を中心に教育目標の達成を意識した運営ができたとする職員と、教育目標を意識した運営ができたとする職員を併せると89.7%であった。			
		③教職員が地域の教育拠点としての学校を意識した協働体制を図る。	協働体制による活動が円滑に実施され、所期の目的を達成した。 おおむね円滑に実施できたが、一部に不十分な点のみみられた。 不十分な点も多々あったが、効果的な部分のみみられた。 活動を円滑に実施することができなかった。	Ⓐ B C D	協働体制による活動が円滑に実施され、所期の目的を達成したと、おおむね円滑に実施できたとする職員が併せて92.3%であった。			

重点課題	重点目標	目標達成に向けた取り組み (担当課)	評価の観点	評価	評価指標の達成度と活動計画 の実施状況	総合 評価	所見	次年度への課題 今後の改善方策	
11 食育の 推進	①食育に対する知識 と理解を深め、健康増 進を図る。	①自身の食生活を振り返ることにより、栄 養バランスを意識して食生活を送ることが できる。(食育コーディネーター)	生徒の80%以上が栄養バランスを意識した食生活を送ることができる。 生徒の70%以上が栄養バランスを意識した食生活を送ることができる。 生徒の60%以上が栄養バランスを意識した食生活を送ることができる。 生徒の60%未満が栄養バランスを意識した食生活を送ることができる。	A B C D	食生活アンケートにおいて、66% の生徒が栄養バランスを意識した 食生活を送ることができていると答 えた。	C	健康的な食生活を 意識している生徒 の割合は、昨年度 と比べ減少してい る。青年期におけ る食事の重要性に ついて、生涯を見 通した長期的な視 点をふまえ、指導 していく必要があ る。	食生活の問題点とし て、朝食欠食や清涼飲 料水の取り過ぎが挙げ られるので、生活習慣 病とも関連させて取り 組む。	
		②料理コンテストに応募することにより、食 に関して興味・関心をもつ。(食育コー ディネーター)	家庭科の授業において生徒の90%以上が料理コンテストに応募した。 家庭科の授業において生徒の80%以上が料理コンテストに応募した。 家庭科の授業において生徒の70%以上が料理コンテストに応募した。 家庭科の授業において生徒の70%未満が料理コンテストに応募した。	A B C D	夏期休業中の課題である調理コン テストに72%の生徒が応募した。				
	②食育を通じて競技 力の向上を図る。	①食事バランスガイドについて理解し、食 生活に利用することができる。(食育コー ディネーター)	生徒の70%以上が食事バランスガイドについて理解している。 生徒の60%以上が食事バランスガイドについて理解している。 生徒の50%以上が食事バランスガイドについて理解している。 生徒の50%未満が食事バランスガイドについて理解している。	A B C D	食生活アンケートにおいて、64% の生徒が食事バランスガイドにつ いて理解し、活用していると解答し た。	B			保健体育や部活動とも連 携をとり、運動・休養・栄 養の大切さを身につけさ せていく。
		②競技力の向上のために補食を意識し て、間食に気を付けることができる。(食育 コーディネーター)	生徒の60%以上が間食に気を付けている。 生徒の50%以上が間食に気を付けている。 生徒の40%以上が間食に気を付けている。 生徒の40%未満が間食に気を付けている。	A B C D	食生活アンケートにおいて75%の 生徒が間食に気を付けていると答 えた。				